

1 自己評価の結果と分析

評価は、4段階 A：大いに達成 B：概ね達成 C：もう一息 D：不十分

Aを4点、Bを3点、Cを2点、Dを1点として、全教職員の評価の平均を数値化した。

No	観点	評価項目	点数	評価
1	学校生活	児童は楽しく元気に学校生活を送っている。	3.7	A
2	児童の学力	児童は学年に応じた基礎学力を身に付けている。	3.3	B
3	主体的な学び	児童がすすんで学び、思考力や表現力を高めるための工夫をしている。	3.4	B
4	算数習熟度別指導	算数の習熟度別学習は効果的に行われている。 (3～6年)	3.8	A
5	探究的な学び	授業では、児童が自ら課題をもち、探究していく展開になるよう工夫している。	3.3	B
6	きたコンの活用	授業ではきたコンを効果的に活用している。	3.2	B
7	教科担任制	教科担任制は効果的に行われている。(5・6年)	3.3	B
8	あいさつ	児童はいろいろな人にすすんであいさつをしている。	2.7	C
9	生活のきまり	児童は生活のきまりを守っている。	2.9	C
10	特別活動	学校は異学年交流や行事等を通して、児童の心を育てている。	3.6	B
11	体力向上健康教育	学校は児童の体力向上や心身の健康づくりを促進している。	3.4	B
12	心の教育	学校は道徳の時間や全教育活動を通して、児童の豊かな心の育成に努めている。	3.6	B
13	読書指導	読書タイム、読み聞かせ、読書月間などの様々な取組は児童の読書活動の推進につながっている。	3.3	B
14	安全防災教育	学校では安全や防災に関する教育が適切に行われている。	3.7	A
15	環境整備	学校は安全に生活できる環境整備がされている。	3.5	B
16	教育相談体制	学校は子供が困ったときや悩んだときの相談体制が整っている。	3.8	A
17	いじめへの取組	学校はいじめ防止に向けた適切な取組を行っている。	3.9	A

【別紙様式1】

18	特別支援教育	学校は配慮を要する児童への支援や、児童一人一人の特性に応じた指導を行っている。	3.7	A
19	開かれた学校	学校は公開授業や tetoru などを通して、教育活動を分かりやすく保護者に伝えている。	3.7	A
20	外部との連携	学校は地域や様々な関係機関と連携を図っている。	3.6	B
21	総合評価	やりがいをもって働いている。	3.7	A

★3.7 以上を A とした。

○【児童の学校生活】【あいさつ】について

児童アンケートでも、「楽しく元気に学校生活を送っている」の肯定的な回答は、増加している。校内別室「さくらルーム」を利用している児童も、教室の授業に参加できる時間が増えてきている。「すすんであいさつ」の数値が低くなった。児童はあいさつをしているつもりであるが、教職員の評価は昨年度より下がり、保護者評価の数値も低くなっている。重点的に指導する。

○【いじめへの取組】【教育相談体制】【特別支援教育】について

生活指導主任を中心に、「いじめ総合対策」を活用した研修を行い、具体的な対応の仕方を学んだ。保護者への「いじめ基本方針」についての説明は、9月の保護者会で全学級実施した。「学校シート」の取組状況は、18項目すべて2（実施している）になった。WEBQU等を活用し、気になる児童の状況を専科教員も交えて学年で共有し、特別支援教室巡回指導教員やSC、巡回心理士からの助言をもとに対応を検討し、丁寧な関わりに努めている。

○【開かれた学校】に向けて

今年度、学校公開の時数を増やし、様々な教科の授業を見ていただくようにした。「tetoru」を活用した家庭への通信、学校HPの定期的な更新を行い、教育活動への理解に努めた。

○【児童の探究的な学び】について

今年度より、より主体的に学習に取り組む児童の育成をめざし、生活科・総合的な学習の時間を中心とした探究的な学びについて研究を進めた。教員自身も、主体的創造的に学習活動を計画する中で、成果と課題が明らかになってきた。次年度は、各学年の探究課題を定め、一単元を重点的に絞り、充実した単元計画の作成に取り組む。

2 改善の方策

○高学年教科担任制について

時間割調整における課題を次年度は改善し、教科の専門性を高める指導力の向上に努めるとともに、引き続き専科教員を含めた学年団としての児童理解を深め、より充実した指導体制を強化する。

○異学年や特別支援学級との交流、外部人材との連携を通して、学び合う活動の充実

今年度から開始した異学年交流（にこにこ班活動）は、児童同士の関わりが深まるよう学年ごとの役割を明確にする。また、あいさつ運動をにこにこ班で行い、あそび以外で関わる機会を増やす。特別支援学級との交流の機会が増え、通常学級の児童と共に過ごす機会が増えている。次年度以降も積極的に行い、充実させる。また、スクールコーディネーターの活用により、保護者や地域に協力を求める機会も増えた。より効果的に外部人材を活用できるよう、校内での情報の引継ぎを丁寧に行い、継続的に実施できるようにする。